

インパルスは デュアル・キャリアを 実現してきたチームだ

パナソニックインパルス
初代主将・二代目監督

田中正仁

Masahito Tanaka

たなか・まさひと。1951年生まれ。関西学院大学時代にフットボールをはじめ、TE兼DBとしてプレー。4年時には副将としてチームを率いた。1974年松下電工(現・パナソニック株式会社LS社)入社。インパルスの初代主将として5年間、チームを率いた。CIスポーツに認定された1987年に監督に就任。1989年度の社会人初制覇、ライスボウル初出場を果たした。1992年に監督を退いた後も総監督、部長としてチームの運営をサポート。2005年4月から2017年まで日本社会人アメリカンフットボール協会理事、現在は顧問としてリーグ運営に携わっている。

パナソニックインパルスはなぜ、実業団チームとして長きにわたり強豪であり続けているのか、OBたちの体験談からそのフィロソフィーを探る。今回はインパルス創部時に主将を務め、CI(コーポレート・アイデンティティ)認定時に監督としてチームを率いていた田中正仁氏に、インパルスの草創期の話を聞いた。



私

が松下電工(当時)に入社したのは、関西学院大学時代、商学部ゼミの先生だった増谷裕久教授から勧められたのがきっかけでした。

当時の松下電工には社内には教養大学という教育機関があり、高卒で入社した社員に大学卒業資格を取得させる制度がありました。インパルス創始者の百尾秀雄さんが教養課長で、増谷教授は教養大学に講師として教えられていました。恐らくアメリカンフットボールのチームを作ろうとしていた百尾さんが、増谷教授に相談をされていたのでしょう。随分早い時期に増谷教授から私と同期の豊島が呼ばれ、松下電工への入社を勧められました。

入社した時はまだアメリカンフットボールはありませんでした。しかし、ちょうど新入社員研修が終わった頃に、百尾さんに私と豊島が呼び出されました。新入社員にとって、指導係である教養課の百尾課長は社長よりも怖い存在でした(笑)。私たちは「何かやらしたかな?」と、戦々恐々としていたのですが、「フットボールをやろ!」と言われて、その年の秋にインパルスが立ち上がりました。

当時の経験者は私と豊島、関学大の先輩である三重野さん、そして、京都大出身の西村さんと東京大出身の高橋さんのみ。他はラグビーや野球など他競技出身者をかき集めたチームでした。大学ラグビー出身の百尾さんも、キッカーとして参加していました。

当時から仕事とフットボールを両立するという考えは当たり前にありました。フットボールは比較的効率的に練習ができる競技であり仕事と両立しやすいというのも、百尾さんが数あるチームスポーツの中でアメリカンフットボールを取り組もうと考えた理由の一つだったと思います。唯一、会社にお願ひしたのは、選手の配属はグラウンドのある本社の近くにして欲しいとい

うことぐらいで、あとは他の社員と同じ条件でした。

創部して十数年間は、選手の母校の後輩や知人の中でフットボールをしている学生に声をかけ、社員としての適性を人事部に審査してもらって入社という形のリクルーティングをしていました。

「仕事とフットボールに50パーセントずつ割くのではなく、どちらも100パーセントで取り組むこと。それができないのであれば採用しない」と、新入社員候補の選手たちには必ず伝えていました。

毎年5名程度のフットボール経験者は獲得できたものの、なかなか関東のチームに勝てない時期が続きました。

チームが劇的に強くなったのは、1987年のCIスポーツ認定後です。監督初年度だった私は会社から「どうしたらもっと強くなれるんだ」と聞かれ、「とにかく優秀な人材を採用してください」とお願いをしました。

会

社からは「昼間も練習したらどうだ?」と、いわゆるゆ「ノンプロ化」を打診されました。しかし、当時の選手たちは仕事とフットボールを両立する前提で入社をしていたので、それでは目指しているものが違うということになり、「仕事とフットボールを両立して、ちゃんと結果を残す」と、会社に約束をして、競技だけに取り組む体制にすることを断りました。

CIスポーツ初年度入社組は、これまで入社の実績がなかった大学の出身者も数多く仲間に加わりました。これは、道浦君(正治・現・パナソニックLS社社長)の功績が大きかったように思います。当時は学生のオールスター戦があり、そこで他の大学のメンバーからも信頼されていたようです。元々、学閥がない会社ですから、初めて入社した大学出身の選手もすぐに馴染めたと感じます。

我々の会社は人を育てるということに力を入れています。

社会人になって大学で学んだことを生かせる場面はもちろんあると思います。しかし、仕事の大半は入社した後に覚えるものです。実際、大学で営業の仕方を教えてくれるところもないでしょう。

営業職に就いている者は、インパルスで活躍していることが仕事においてもプラスになることが少なくありません。たとえば、テレビ放送のある試合で活躍した選手が、お客様に商品説明にうかがった際にとっても喜んでいただけたいという話をよく聞いていました。

一方で、社内ではインパルスの一員であることが特別になってはならないと心がけてきました。同じ仕事をしているからこそ、社員の間がフットボールでも活躍しているからこそ、社員の間がインパルスを我がチームとして応援してくれるのです。

近年はアスリートのセカンド・キャリアが注目され、様々な支援サービスが展開されています。しかし、創部当初からデュアル・キャリアを追求してきたインパルスの選手たちは、引退後も選手として学んだことを生かして仕事で活躍しています。インパルスOBの道浦社長は、よきロールモデルでしょう。インパルスの取り組みがある意味、時代を先取りしていたと考えると誇らしく思えます。

今のインパルスに望むことは、やはり勝利です。結果を残すことで初めて仕事とフットボールを両立するインパルスの取り組みが周囲に注目され、影響を与えることができると思っています。パナソニックLS社の皆さんはとも優しく、負けると慰めてくれるのですが、社員の皆さんには選手たちにもっと厳しく、「頑張れ!」、「負けるな!」と叱咤激励し欲しいですね(笑)。



1988年、監督時代の田中正仁氏(中央)
photo:Kiyoshi Ogawa